

## 『ジェイン・エア』とフェミニズム

—— 第二次世界大戦後から1978年まで ——

杉村 藍

### *Jane Eyre and Feminist Criticism :* From the Post-World War II Period to 1978

Ai SUGIMURA

#### I はじめに

Charlotte Brontë (1816-55)の代表作 *Jane Eyre* (1847)が出版され、今年でちょうど150年になる。この間小説は多くの人々に読まれ、またさまざまに批評されてきた。時代によって読み方や研究方法には移り変わりが見られたが、現在 *Jane Eyre* 批評の主流をなしているのはフェミニズム批評である。Margaret Drabble (1939-) はフェミニズム批評について、1960年代後半から1970年代にかけて明確にその独自性を獲得した文学運動の一つであり、新しいフェミニストの意識によって女性による過去及び現在の文学作品を改めて検討しようとするものだと定義している。<sup>1</sup> Drabble は「新しいフェミニストの意識」として具体的にはステレオタイプの打破、男性批評家・出版業者に想定される偏見、そして女性作家の経済状況などを挙げている。これらはフェミニズム運動が盛んになる以前、*Jane Eyre* の出版当初の書評にすでに見出される問題意識でもある。<sup>2</sup> そして1960年代後半以降、文学研究においてフェミニズム批評が本格化すると同時に、女性作家による女性を主人公とした小説 *Jane Eyre* は多くの批評家の注目を集め、*Jane Eyre* 研究はかつてない「黄金時代」を迎えたのである。<sup>3</sup>

フェミニズムによってもたらされたこの黄金時代は、1979年、Sundra M. Gilbert と Susan Gubar の共著 *The Madwoman in the Attic* (1979)で一つの頂点を迎えた。彼女らの *Jane Eyre* 論こそは、その後のフェミニズム批評による *Jane Eyre* 論に多大な影響を与え、多くの研究者たちによってもっとも頻繁に引用されている大著である。しかしながら、フェミニズムに基づいた *Jane Eyre* 研究は Gilbert と Gubar 以前にもかなり進み、その主な問題意識はほとんどがすでに指摘されていた。そのような状況のなかで発表された *The Madwoman in the Attic* は一体どこにその意義があるのか、また、それまでのフェミニズム批評とはどのように関連しあっているのであろうか。この点について考えるための前提として、ここでは第二次世界大戦後の1946年から *The Madwoman in the Attic* が出版される前年1978年までの *Jane Eyre* 批評を、フェミニズムの視点から跡づけてみたい。<sup>4</sup>

#### II 新しいフェミニズム

第二次世界大戦終結直後の *Jane Eyre* 批評では、それ以前の批評と同様のフェミニズム讃歌がいくつか続いた。たとえば Phyllis Bentley はヒロイン Jane の人物創造について次のように

述べ、その独創性、すなわち Drabble が指摘したステレオタイプの打破という点を賞讃している。

... she [Jane] cannot live in dependence but must earn her bread. She has a mind, too; she reads, she paints, she engages in logical argument, she displays a biting wit. As she says herself, she is "a free human being with an independent will." She accepts entire responsibility for her own welfare. In a word, she is the modern emancipated woman — the first in English fiction — struggling with age-old and basic human problems.<sup>5</sup>

自立した女性、英国小説最初の解放された現代女性という Jane への高い評価は、大戦以前の *Jane Eyre* 批評の流れを汲むものであり、作者 Charlotte Brontë の言葉をそのままに受けとめた読み方でもあった。このように *Jane Eyre* をフェミニズム思想の理想的な手本と見なし、ヒロインの斬新さを賞讃するという批評は、大戦後もしばしば見られた。

しかしながら当時、従来の *Jane Eyre* 礼讃の傾向とは別に、1960年代後半以降本格化するフェミニズム運動に直接つながっていく「新しい」フェミニズム批評が登場する。それは Richard Chase の *Jane Eyre* 論である。彼の *Jane Eyre* 解釈の最大の特徴は、心理学を適用している点であろう。彼は心理学的見地から Charlotte について研究した Rosamond Langbridge の *Charlotte Brontë: A Psychological Study* (1929) に影響を受けており、Langbridge の視点を活かしながら男性、女性という性差とその心理的影響に注目している。彼はまず Brontë 作品に見られる人生と思想の原理を次のように性のエネルギーと結びつけ、姉妹が男性支配の世界観をもっていたのだと述べている。

The "principle" of life and thought in the Brontë novels is sexual energy; the universe is the stone and flesh which make the energy palpable; it is a masculine universe. Art is the representation of the "principle" as the Brontë heroines perceived it embodied in nature, in man, in seraph, and in fiend.<sup>6</sup>

そして厳格で抑圧的な父 Patrick についても "... there is no doubt that Haworth Parsonage was a man's society, ... He [Patrick] was the living symbol of the nineteenth-century patriarch"<sup>7</sup> と述べ、男性支配社会のなかで抑圧された Brontë たちの心理が作品を読み解く鍵となっていることを強調している。また、Thornfield Hall が焼け落ちた際、Rochester が Bertha を救おうとして片腕と視力を失った怪我に関してもそこに性的な象徴を見出している。

Rochester's injuries are, I should think, a symbolic castration. The faculty of vision, the analysts have shown, is often identified in the unconscious with the energy of sex. When Rochester had tried to make love to Jane, she felt a "fiery hand grasp at her vitals"; the hand, then, must be cut off.<sup>8</sup>

以上のように、Chase の *Jane Eyre* 論は Freud に始まる性に注目した深層心理学に基づいている。1930年代以降、*Jane Eyre* は明確なフェミニズムの意識をもって読まれ、研究され始め

ていたが、当時のフェミニズム批評と Chase の *Jane Eyre* 論との最大の違いは次の点にある。すなわち、作者やヒロインへの心理学的アプローチである。それまでフェミニズム批評が問題としてきたのは、女性の権利や自由を獲得するために必要とされる物理的条件、すなわち経済力であった。例えば1932年に発表された Norman Collins の *Jane Eyre* 論には “There is something in Charlotte’s propaganda for her sex that recalls that exquisite modern artist, Mrs. Virginia Woolf, who has seen the connection as clearly as Charlotte saw it, between independent means and an independent mind.”<sup>9</sup> とあり、精神的自立が経済的自立と切り離せないという見解を明確に示している。Collins がここで名前を挙げている Virginia Woolf (1882-1941) の著書 *A Room of One’s Own* (1929) は、そのタイトルが示すとおり、女性作家を支えるための物理的条件の必要を唱えたものであった。この時期のフェミニズム批評は、精神的自立とそれを支える経済的自立との関連が中心的な位置を占めていたのである。

一方これに対し、Chase の *Jane Eyre* 論では心理学的な問題が議論の中心になっている。経済的な問題から心理学へ、これが Chase に始まる「新しい」フェミニズム批評への移り変りの最大の特徴である。彼が示した性の意識に対する強い関心、男性（父親）による女性への心理的抑圧などは1960年代後半以降に本格化したフェミニズム批評の問題意識そのものである。こうした問題意識の源流は、1948年に発表された Chase の *Jane Eyre* 論にあったのである。

Chase が点した心理学的アプローチの灯が1960年代後半以降の *Jane Eyre* 研究に受け継がれていく過程は、例えば1966年に発表された Inga-Stina Ewbank の *Their Proper Sphere* に見ることができる。Ewbank はフェミニズムに基づいた *Jane Eyre* 論を展開している一人である。<sup>10</sup>

Intimately bound up with the drive towards independence in the novel is the awareness that, ultimately, independence is not enough. Plot, characterisation and every other element in the novels go to emphasise the other aspect of Charlotte Brontë’s concern . . . . The real subject of all Charlotte Brontë’s novels is the emotional and intellectual needs (the two inextricably related) of a woman, and her art is the expression of a personal vision of those needs.<sup>11</sup>

Ewbank は、Charlotte が求めているものは経済的自立だけではなく、彼女の小説の真の主題は女性の情緒的・知的必要であると述べている。Ewbank が指摘している「女性の情緒的・知的必要」とは多分に恋愛による心理的变化を指しており、必ずしも Chase が示した深層心理や性の意識への考察と直接的に結びつくものではない。しかし、経済力という物質的な条件から感情や情緒といった内的な問題へという視点の移動は、1930年代のフェミニズムから1960年代以降の「新しい」フェミニズムへという、問題意識の変化の過程をそのまま表わしているといえる。こうして1960年代以降、心理学を援用したフェミニズム批評の全盛期が始まるのである。

### Ⅲ フェミニズムと心理学

1960年代後半以降のフェミニズム批評は、心理学、特に Freud が創始した精神分析学と結びつくことによって飛躍的な発展を遂げた。これは Freud が無意識の領域、特に抑圧された性の潜在意識の重要性を主張していたからであろう。男性、女性という性差がもたらす影響や、女性の抑圧された無意識に強い関心をもっていたフェミニズムは、当然 Freud の深層心理学

と結びつきやすかった。

また、*Jane Eyre* の場合に関していえば、作品から主人公の心理ばかりでなく作者 Charlotte Brontë の心理をも読み取りやすかったことが、このような心理学を援用したフェミニズムの導入を容易にしたにちがいない。なぜなら、Elizabeth Gaskell (1810-65) による伝記 *The Life of Charlotte Brontë* (1857) に端を発する伝記研究がきわめて盛んだったことにより、Charlotte の実人生と作品との関連は早くから丹念に研究されていたからである。女性作家による女性を主人公とした小説 *Jane Eyre* は、ヒロインに加えてそこに投影された作者自身の無意識を読み取るための土台がしっかりと出来上がっていた。作者とヒロインという二人の格好の研究対象を合わせもった *Jane Eyre* は、心理学を応用したフェミニズム批評にとってはまさに最適の文学作品であったのである。

こうして Freud に始まる深層心理学の援用によって、それまでのフェミニズムには見られない新しい問題意識がいくつか登場した。ここではそれらを三つに大別し、それぞれについて具体的な批評文を見ながらその特徴を考えてみたい。主な三つの項目とは (i) 性の意識、(ii) Red Room への関心、そして (iii) Bertha Mason への関心、である。

#### (i) 性の意識

Freud 心理学の特徴ともいえる性に関する問題意識は多岐にわたっており、このように一つにまとめてしまうのはあるいは適切ではなかいかもしれないが、ここではフェミニストたちがまず第一に注目した男性、女性という性の意識に関わる問題をいくつか挙げていこう。

*Jane Eyre* のフェミニズム批評で男女の性に注目した指摘の一つとしては、父権制社会における女性の心理的抑圧が挙げられるであろう。*Jane Eyre* が書かれたヴィクトリア朝では男女の役割分担が非常に厳格であり、特に家庭において家父長となる男性は強力な権限をもっていた。こうした社会においては女性の立場はきわめて従属的なものにすぎない。これは作中の Jane にとっても、また一家のなかで父と弟が特に重要な位置を占めていた作者 Charlotte にとっても当てはまることであった。このような状況から、父権制社会における女性の圧迫は *Jane Eyre* 研究において多くのフェミニストの問題意識を刺激した。この点に注目した批評家の一人 Helen Moglen は、小説冒頭の Gateshead でのエピソードに関して次のように述べている。

But it is from John Reed, the violent, spoiled, bullying son that she [Jane] learns most painfully what it means to be poor and dependent in a world which respects wealth and position. It is from John that she learns the meaning of powerlessness, the meaning of being a female in a patriarchal society.<sup>12</sup>

父権制社会における女性の精神的圧迫は、次の Lowood や Thornfield においても指摘され得る問題であり、*Jane Eyre* のフェミニズム批評のテーマの一つとなっている。

性の意識に関するフェミニズムのもう一つの問題は、社会による女性の心理的抑圧と関連している。男性中心の社会が女性に強いたものは数多くあったが、そのなかでもフェミニストたちが注目したのはやはり性の意識に関するもので、特に女性の性的欲望への社会的圧力は多くの関心を集めた。「家庭内天使」として夫や家族に奉仕することを期待された女性たちは、同時に性的な欲望をもつものではないとされ、暗黙のうちにそれを禁じられていた。ヴィクトリア朝社会では性的情熱は女性の属性とは見なされなかったし、そうあってはならないと考えられていた。そのためそうした情熱を女性が示した場合、それは「狂気」と断定された。*Jane*

*Eyre* は心理学的に研究が進んだことにより、作中から女性の性的欲望に関連した指摘がなされるようになった。特に放縦な欲望が狂気に至るという問題に関しては、後で述べるように Rochester の前妻 Bertha と関連して盛んに取り上げられている。ここでは女性の性的情熱と狂気との関係について述べた Elaine Showalter の著書から引用してみよう。

Madness is explicitly associated with female sexual passion, with the body, with the fiery emotions Jane admits to feeling for Rochester. In trying to persuade her to become his mistress, Rochester argues that Jane is a special case: "If you were mad," he asks, "do you think I should hate you?" "I do indeed, sir," Jane replies; and she is surely correct.<sup>13</sup>

このなかで社会によって否定された女性の性的情熱は明らかに狂気と関連づけられている。そして Showalter は Rochester に対する Jane の感情のなかにもその危険性を読み取っている。<sup>14</sup> 社会によって抑圧された女性の性的欲望と、その抑圧によってもたらされ得る狂気の可能性、これらこそはフェミニズムが Freud による性の心理学を援用したことで登場した問題意識といえよう。

男性中心社会による女性への心理的圧迫とそれがもたらす狂気に多大な関心を寄せていたフェミニストたちは、当然、抑圧の源となる男性にも注目した。男性を女性の迫害者とみなす傾向が強かったことや Freud の影響などから、男性と女性との関係は敵対者という対立関係で捉えられることが多くなった。1930年代以降の初期のフェミニズム批評が、遺産の獲得によって Jane と Rochester との結びつきを精神的にも物質的にも等しいものとして讃美していたのに対し、1960年代後半以降の新しいフェミニズムにおいては、いくつかの例外もあったが、二人の関係を対等なものとするだけでは飽き足らず、そこに対立関係を持ち込み、さらには Jane を上位に位置づけるというそれまでにはない新しい傾向を顕著に示すようになった。このような解釈をしている例として、Barbara Hill Rigney の *Jane Eyre* 論を見てみよう。

Ultimately, however, as Jane seeks out Rochester in the final chapters to find his house in ruins, his body crippled and blinded, his worst fears realized in the depletion of his powers of masculinity, she finds herself his superior rather than his equal . . . .

Whether sexual, political, or psychological, it is a terrible justice which Brontë calls down upon Rochester. "My master" has become "my Edward" and Jane can aggressively announce, "Reader, I married him".<sup>15</sup>

Rigney は Jane を Rochester と対等な位置にではなく、盲目で不具となった彼の上位に位置づけている。彼女は他の部分で "To preserve his own sexual identity, Rochester must rob Jane of hers."<sup>16</sup> とも述べており、ここからも Jane と Rochester の関係がすでに対等な者同志の理想的な恋愛といった平和なものでなくなってしまうことがわかる。二人の関係は、自己の性のアイデンティティーを保ったままどちらがイニシアティブを獲得するか、相手を制し生き残るかといった、一種の生存競争の様相を呈しているのである。男女間の性差に注目しそこに対立関係を読み取ったことから、Jane と Rochester の恋愛が平和で理想的なものであるという考

えは、もはや過去のお伽話にすぎなくなってしまったのである。

男性との関係が対立的なものになったのに反比例して、フェミニズム批評では女性登場人物に対する関心が高まっていった。そのもっとも顕著な例は Bertha である。彼女に関しては後の部分で取り上げることにして、ここではその他の女性登場人物への批評家の注目を見てみよう。

Charlotte Brontë also succeeds remarkably — far better than George Eliot, for example — in depicting noncompetitive relationships between women . . . .

. . . The image of the two girls lying in a single bed — Helen dies in Jane's arms — with all its sexual ambiguity suggests the special intimacy of the bond between women . . . . In many ways Charlotte Brontë conveys her conviction that intimacy between women may be more profound, more *balanced*, than any union possible between the sexes.<sup>17</sup>

これはフェミニズム批評家 Patricia Meyer Spacks の意見であるが、彼女は Charlotte が異性間の結びつきよりも、女性同志の関係により意義を見出していたと考えている。そして作中の Jane と他の女性登場人物との親密な関係に触れ、そこに同性愛的な要素をも読み取っている。フェミニズムは何よりも女性に注目した思想であり、研究の対象も当然女性中心となる。異性である男性を敵対者と見なしたことから、それだけ女性同志の関係への関心の深さがずっと増した。それまで主人公の Jane とともにもっとも批評家に取り上げられてきた Rochester は Jane の被支配者の地位に追われ、それに反比例して他の女性登場人物の重要性が高まったのである。ここで挙げた Helen のほかにも、Moglen は Gateshead の保母 Bessie に母親のイメージを見出しているし<sup>18</sup>、また Maurianne Adams は Jane の精神的成長は Rochester との結婚によってもたらされたのではなく、Moor House での Rivers 姉妹との関係によるものであると、女性同志の関係の重要性を強調している。<sup>19</sup> このように、男性登場人物を敵対視したことにより、*Jane Eyre* のフェミニズム批評では同性である女性との関係についての研究の比重が増していったのである。<sup>20</sup>

そのほかに *Jane Eyre* のフェミニズム批評で性に注目したものとしては、Electra complex が挙げられるであろう。Electra complex とは精神分析学の用語で、娘が父親に愛着をもち、母親に反感を示す傾向をいう。<sup>21</sup> すなわち、娘が父親を性の対象として見、母親を父と自分との関係における敵対者と見なすことである。*Jane Eyre* には “. . . there are twenty years of difference in your ages. He [Rochester] might almost be your [Jane's] father.”<sup>22</sup> という記述があり、Rochester は Jane の父親にもなり得る年齢という設定がされている。一方作者 Charlotte に目を向けると、伝記から彼女もまた父親 Patrick を非常に敬愛していた様子が窺える。作品からもそして伝記的側面からもこれは批評家たちの問題意識を捉えるに充分であった。David Smith もそうした問題意識をもった一人で、彼は Freud 心理学の立場から、Jane と Rochester の恋愛に近親相姦の要素を読み取っている。<sup>23</sup>

以上のほかにも、“a black pillar” と形容される Mr. Brocklehurst に phallic symbolism を読み取るもの<sup>24</sup> や、Jane に処女性喪失や妊娠への恐怖を指摘するもの<sup>25</sup>、マゾヒズムやサディズムといった性的倒錯に言及するもの<sup>26</sup> など、性に関連した問題は非常に多岐にわたる。このように、性心理学を援用することによって、それまでの *Jane Eyre* 批評にはなかった新しい問

題意識が次々と誕生した。フェミニズム批評は20世紀後半を代表する研究手法であるが、それは *Jane Eyre* にとっても問題意識の拡大という点で非常に大きな影響を及ぼしたといえる。

(ii) Red Room への関心

1960年代後半以降のフェミニズム批評で注目を集めるようになった問題点の一つに、Red Room がある。これは作品の冒頭、Gateshead Hall で Jane が Reed 家の息子 John に抵抗した罰として閉じ込められる部屋のことである。この事件をきっかけに Jane は Lowood に送られることになるのであるが、この部屋のイメージは後の Thornfield で彼女が館を去る前夜にも再び繰り返され、いずれの場合も Jane の人生に重大な変化が訪れる先触れとなっている。Red Room はこのように本来重要な場面として人々の注意を集めるに充分であったが、フェミニストたちによって心理学的な研究、特に女性のイメージと結びつけられることによってさらに重要な空間として注目されるようになった。そうしたフェミニズム的な解釈によって Red Room はどのように論じられているのか、例を挙げて考えてみよう。

その一つは、Red Room を女性的なイメージから「子宮」と結びつけた解釈である。Moglen の次の意見を見てみよう。

... all the color of blood, of fire, of passion — contribute to the fearsome sublimity of the scene. It is a terrifying womb-world from which she [Jane] is born into a new state of being . . . . Her fainting fit marks the end of the submission of her childhood and the beginning of a new stage of growth.<sup>27</sup>

カーテン、絨毯、テーブルクロスに至るまでこの部屋をその名のとおり染め尽くす赤という色彩、そこから連想される血液、そしてこの事件を契機に始まる Jane の新しい成長過程、これらが Freud 的な象徴性を帯びて「子宮」というきわめて女性的な空間として新しい意味を獲得している。Red Room という空間のもつ「女性性」に関しては Showalter も指摘している。彼女もまた Freud の性心理学を援用している。

The red-room to which Jane is sentenced by Mrs. Reed for her display of anger and passion is a paradigm of female inner space: . . .

With its deadly and bloody connotations, its Freudian wealth of secret compartments, wardrobes, drawers, and jewel chest, the red-room has strong associations with the adult female body,<sup>28</sup>

Showalter はさらに、Freud に人類学的な視点を加えることにより、この Red Room の場面に少女から大人の女性へという一種の通過儀礼の意味をも読み取っている。そしてこれによって Showalter は、1960年代後半以降のフェミニズムがあげた最大の成果ともいえる解釈、Bertha Mason の解釈へと論を展開させていくのである。

Jane's ritual imprisonment here, and the subsequent episodes of ostracism at Gateshead, where she is forbidden to eat, play, or socialize with other members of the family, is an adolescent rite of passage that has curious anthropological affinities to the menarchal ceremonies of Eskimo or South Sea Island tribes. The passage into

womanhood stresses the lethal and fleshly aspects of adult female sexuality. The "mad cat," the "bad animal" (as John Reed calls Jane), who is shut up and punished will reappear later in the novel as the totally animalistic, maddened, and brutalized Bertha Mason; her secret chamber is simply another red-room at the top of another house.<sup>29</sup>

以上のように、Red Room は女性的なイメージと結びつけられることによって、ヒロイン Jane の成長と深い関わりをもつ空間として批評的に重要な位置を占めるようになった。そしてその重要性は、Showalter が示したように、Bertha Mason と連関することでさらに一層増していったのである。<sup>30</sup>

### (iii) Bertha Mason への関心

Bertha を Jane のもう一つの自我、彼女の分身とする解釈こそは、フェミニズム批評最大の成果といえるであろう。そこで次に、フェミニズムにおける Bertha Mason への関心の高まりについて考えてみたい。

Bertha は第二次世界大戦以前までは、Rochester の過去の放蕩の象徴、もしくは彼と Jane との結婚の障害として捉えられる程度で、Jane や Rochester に比べ明らかに批評のなかで取り上げられる頻度は低かった。しかし文学研究に Freud の影響が浸透してくると、性の意識に対する関心が高まり、Bertha はコントロールできない性的情熱の化身として徐々に注目を集めるようになった。たとえば、フェミニストではないがこの時期に Bertha に注目した W. A. Craik の意見を見てみよう。

She [Bertha] is the embodiment of ungoverned passion, . . . and demonstrates both the power and the failing of Mr Rochester, who will not send her to Ferndean because it is unhealthy, but insists on his right to act as if she does not exist.<sup>31</sup>

ここで Bertha は抑制のきかない (性的) 情熱の化身とされているが、それがヒロインの Jane と結びつけられることはなく、夫であった Rochester との関連において論じられている。彼女が Jane に対して担いうる意味は性的情熱への「警鐘」であり、そういうものとしてこの時期の批評家は Bertha を捉えていた。

Bertha を Jane と同一視するという意見を最初に示したのは、1970年の James Hunt Maddox, Jr. の論文であろう。彼は次のように述べている。

Jane is Rochester, just as, to a lesser degree, she is Bertha Mason and she is St. John Rivers. In this trio of characters surrounding Jane, Charlotte has externalized in exaggerated form certain aspects of Jane's own character.<sup>32</sup>

Maddox の論文は特にフェミニズムに基づいたものではない。Bertha と Jane の関連についてもこの二人だけを挙げているわけではなく Rochester や St. John も加えている。Maddox は Bertha に関してほかの箇所でも "Bertha is not only Rochester's curse but also the threat of what Jane may become."<sup>33</sup> と述べており、Craik が示したような「警鐘」として機能する Bertha という解釈も継承している。しかし Bertha を Jane の人格の一部として位置づけた最初のもの



として、彼の論文はやはり注目に値する。Jane と Bertha は一見まったく対照的な人物創造がなされていたため、この二人をいかなる形にせよ関係づけるという解釈は、それだけで非常に革命的であった。Maddox はフェミニズムによる本格的な Bertha 論展開への橋渡しの役目を果たしていたといえる。

Spacks は、フェミニズムに基づいて Bertha の重要性を主張し、Bertha をヒロイン Jane と積極的に結びつけた最初の批評家である。彼女はまず “The “external force” is the mad wife [Bertha] lurking in the attic, a melodramatic figure epitomizing one of the novel’s central concerns.”<sup>34</sup> と述べて小説における Bertha の重要性を指摘し、さらに次のように述べている。

In the distance she [Jane] hears the goblin laugh and “eccentric murmurs” of the maniac she thinks is Grace Poole, the woman who objectifies the dangers of that anger which Jane somewhat precariously controls.<sup>35</sup>

Spacks は Grace Poole (実際には Bertha Mason) を、Jane が用心ぶかくコントロールしている怒りの危険性を客体化した人物と捉え、Jane と Bertha の密接なつながりを暗示した。

Bertha を Jane の分身と明言し、二人の同一性をはっきりと示した最初の批評家は Helen Moglen であろう。Moglen が Bertha の重要性を確信していたことは明らかである。彼女はまず従来の批評家と同じく Bertha の Jane に対する「警鐘」としての役割に注目し、そこからさらに男性の権威への反抗、恐るべき母、両性具有的性質と彼女のさまざまな要素を指摘し、そして Jane の第二の自我としての Bertha の意義へと論を展開している。

Berthe [sic] has from the beginning functioned as a warning against the consequences of Jane’s desire for emotional release, her longing to cast aside conventional restraints . . . . She is the menacing form of Jane’s resistance to male authority, her fear of that sexual surrender which will seal her complete dependence in passion. Berthe’s joyless laugh is a metaphor for sensuality without mind, feeling without control. She is a jealous, vengeful mother who prohibits marriage to the beloved father. An androgynous figure, she is also the violent lover who destroys the integrity of the self; who offers the corruption of sexual knowledge and power — essentially male in its opposition to purity and innocence.

. . . . As Berthe’s importance as an alter ego for Jane is central in the novel, her importance in Rochester’s psychosexual development is crucial as well.<sup>36</sup>

Moglen は Bertha を “an alter ego for Jane” と述べ、さらに Jane のダブルとしての彼女の重要性を作品の中心的な位置にまで据えた。それまであまり顧みられることの少なかった Bertha をヒロインと結びつけることにより、深層心理学を応用したフェミニズム批評は *Jane Eyre* 研究にまったく新しい可能性を拓いた。Moglen の Bertha 解釈は *Jane Eyre* 研究の新たな時代の到来を鮮明に告げるフェミニスト宣言であったのである。

Moglen の後も Adams や Rigney といった批評家たちがこの Bertha = Jane という解釈を継承していった。Bertha の解釈には性に注目した心理学が重要な役割を果たしていたので、先に「(i) 性の意識」の部分で述べたさまざまな性に関わる問題が Bertha 自身の解釈とも関連しあって

いる。例えば Rigney は Jane と Bertha を結びつけたうえで、Bertha に父権制社会での女性に対する精神的圧迫と狂気との関係を読み取っている。

However, Bertha is as much a doppelgänger for Jane as for Rochester: she serves as a distorted mirror image of Jane's own dangerous propensities toward "passion," Brontë's frequent euphemism for sexuality. Bertha embodies the moral example which is the core of Brontë's novel — in a society which itself exhibits a form of psychosis in its oppression of women, the price paid for love and sexual commitment is insanity and death, the loss of self. Female ontological security and psychological survival in a patriarchal Victorian age, Brontë maintains, can be achieved only through a strong feminist consciousness and the affirmation of such interdependent values as chastity and independence.<sup>37</sup>

Rigney はまた "It is worthy of note that she attacks male figures, never her female keeper, Grace Poole, or Jane, though she enters Jane's room and leans above her sleeping form."<sup>38</sup> という興味ぶかい指摘をしており、ここにはフェミニズム批評独特の問題意識の一つである女性同志の協力関係の図式を見ることができる。

Bertha の解釈は以上のように、性の意識や、また先に述べた Red Room の問題とも関連している。ここで扱った心理学の主な問題意識三点は、このようにそれぞれが密接に関係しあい互いに刺激あって、*Jane Eyre* 研究の心理学的なアプローチの可能性をさらに高める働きもしている。フェミニズムがもたらした問題意識の多様化は *Jane Eyre* 批評を非常に豊かなものにしていくのである。

#### IV 神話の崩壊

1960年代後半以降のフェミニズム批評が示した見解のなかで、それまでのフェミニズム批評と大きく異なるもう一つの点は、フェミニズムの見地から *Jane Eyre* を読んだ場合、この作品に限界があることを指摘したことであろう。1930年代以降のフェミニズム批評では、遺産獲得による Jane と Rochester の精神的にも物質的にも対等な者同志の「理想的結婚」としたい、因習を解かれた解放された女性としてのヒロインが描かれているといった指摘が相次ぎ、*Jane Eyre* はイギリス初のフェミニズム小説としてひたすら賞讃を浴びていた。しかし作品研究に深層心理学を応用したことから作品に直接描かれていない感情にまで批評家の目が向けられるようになり、1960年代後半以降はこうした「フェミニズム神話」は突き崩されることになる。

小説の第12章で高らかに女性の社会進出の必要を訴えた Jane がなぜ家庭の一主婦に留まるのか、なぜ広い世界ではなく鬱蒼とした Ferndean の森の館に閉じこもるのか、こうした疑問にフェミニストたちは果敢に挑んだ。

Spacks は Charlotte のフェミニストとしての限界を指摘した一人であり、Charlotte がそれまでのフェミニズム批評で評価されていたように革命的ではなく、むしろ他に依存し支配されたいという「女性的な」心理的欲求を受け入れていたと、従来の見解とはまったく反対の Charlotte 像を提示した。

Charlotte Brontë recognizes the difficulties of woman's lot; but her sensibility is not revolutionary. With her profound faith in the value of emotion, she appears to accept as given the woman's psychic need for dependency and for control, and the close relation between them. Her fantasies provide images of how these needs can be fulfilled; but she implies no criticism of their existence.<sup>39</sup>

Charlotteは小説のなかで、Janeを通して父権制社会が規定した女性像を否定し非難していた。しかし実際には彼女はそれを受け入れていたのではないかという Spacks の意見は、作品のもつさまざまな矛盾点に一つの解答を与えることになった。

Moglenもまた、フェミニズム小説としての *Jane Eyre* の限界を指摘している。彼女は、もっとも問題になる小説の結末部分を取り上げて次のように述べている。

Jane's money and social status, even her confidence and self-knowledge, would not have defended her against the arrogance and pride supported by society through its laws, its structures, its attitudes, its mythology. Nor would her new position, her developed self, have protected Rochester from the fears and actual dangers associated with the "masculine" role assigned to him.

So strong are these external forces that the reduction of Rochester's virility and the removal of them both from contact with society are necessary to maintain the integrity of the emergent female self . . . . Brontë's myth reflects those social limitations even as it attempts to define a new feminist freedom.<sup>40</sup>

MoglenはJaneが得た財産や社会的地位、自分自身についての理解ですら社会やRochesterの表わす男性性といった外的な力に対しては無力でしかないと非常に冷徹な見方を示している。それらから身を守り、かろうじて相手との対等性を維持するために必要になる条件、それがFerndeanに引きこもるという結論であったのだという。Moglenはここに、Charlotteが示そうとしたフェミニズム的な自由の限界を指摘しているのである。

以上のように、これまでフェミニストによってつねに賞讃されてきた *Jane Eyre* は、心理学に基づいたフェミニズム批評の進展により、フェミニズムの理想を描いた小説から、その理想に見え隠れする女性の現実と限界を描いた小説へと大きくその評価を変えていったのである。

## V 結び

第二次世界大戦後、Richard Chaseに始まった心理学を援用したフェミニズム批評は1960年代後半以降大きな発展を遂げ、*Jane Eyre* 研究における20世紀後半のもっとも有力な批評方法に成長している。1978年までの *Jane Eyre* のフェミニズム批評で中心的な役割を果たしたのは Susan Meyer Spacks, Helen Moglen, Elaine Showalter, Barbara Hill Rigneyらであるが、なかでも Moglen は今回指摘したフェミニズムの諸問題点をほとんどすべて指摘しており、BerthaをJaneのダブルとして初めて明確に示すなど、その先鋭な意識は *Jane Eyre* 研究におけるフェミニズム批評を代表するものといえよう。

ここで挙げたように、性の意識や Red Room、Bertha の解釈など、フェミニズムの主だった

問題点はほとんどすべてがこの時期にすでに指摘されている。1979に *The Madwoman in the Attic* が登場する土壌は豊かに準備されていたといえる。こうした状況のなか現われた *The Madwoman in the Attic* の特徴、その意義はどこにあったのか。この点については次の機会に考えてみたい。

## 注

- <sup>1</sup> Margaret Drabble ed., *The Oxford Companion to English Literature*. Fifth edition (Oxford University Press, 1985), p. 344.
- <sup>2</sup> *Jane Eyre* 出版当時の批評に見られるフェミニズムの要素については拙論「*Jane Eyre* の初期批評とフェミニズム」(『流通経済大学論集』Vol. 30, No. 3, 1996. 1, pp. 30-40)を参照のこと。
- <sup>3</sup> R. W. Crump 編集の書誌 *Charlotte and Emily Brontë 1955-1983: a reference guide* (Boston: G. K. Hall & Co., 1986)によると、Charlotte と Emily Brontë に関して出版された文献の数は、第二次大戦後から1960年代前半までは平均しても一年当り40に満たない。*Jane Eyre* と *Wuthering Heights* (1847) の出版100周年に当たる1947年と、Emily の没後100年に当たる翌1948年の文献数がそれぞれ61と56と際立って多いのを除くと、そのほかの年は20から30前後でやや少ない。ところが1960年代後半以降文献数は徐々に増え始め、1970年代に入ってから60から70、多い年では80を超えている。この数字は *Jane Eyre* だけでなく Charlotte のほかの作品や Emily 関係の文献も含む数であるが、このなかには実際に *Jane Eyre* のフェミニズム批評が多く含まれているので、*Jane Eyre* 研究の高まりとフェミニズム批評との関連の一端を証明していると見ることができる。書誌を編集した Crump 自身、Brontë 研究においてフェミニズム批評が本格化した年を1970年と特定しており (Crump, 'Introduction' p. xiii)、1970年以降の文献数が示す研究の高まりとフェミニズム批評の導入との間には明らかな関連が指摘できる。
- <sup>4</sup> 本論は、名古屋女子大学『紀要』第43号、人文・社会編 (平成9年3月) に掲載された「『ジェイン・エア』とフェミニズム—ヴィクトリア朝後半から第二次世界大戦まで—」(pp. 287-99)の続編である。ヴィクトリア朝後半から第二次世界大戦までの *Jane Eyre* 批評におけるフェミニズムについては拙論を参照のこと。
- <sup>5</sup> Phyllis Bentley, "Jane Eyre" In *The Brontës*. (London: Home & Van Thal Ltd., 1947), p. 68.
- <sup>6</sup> Richard Chase, "The Brontës, or Myth Domesticated." In *Form of Modern Fiction*. Ed. by William Van O'Connor (Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1948), p. 105.
- <sup>7</sup> *Ibid.*, p. 104.
- <sup>8</sup> *Ibid.*, p. 109.
- <sup>9</sup> Norman Collins, "The Independent Brontës." In *The Facts of Fiction*. (London: Victor Gollancz Ltd., 1932), p. 182.
- <sup>10</sup> 1948年の Chase から、この Ewbank のように1960年代後半もしくは70年代に入ってフェミニズム批評が本格化するまでの約20年間は、フェミニズムによる *Jane Eyre* 批評は意外と少ない。これは、作品から思想を切り離し、文体、用語、イメージリーなどを研究の対象とした New Criticism が流行した影響ではないかと思われる。
- <sup>11</sup> Inga-Stina Ewbank, *Their Proper Sphere: A Study of the Brontë Sisters as Early Victorian Female Novelists*. (London: Edward Arnold Publishers Ltd., 1966), pp. 159-60.
- <sup>12</sup> Helen Moglen, "Jane Eyre: The Creation of a Feminist Myth." In *Charlotte Brontë: The Self Conceived*. (The University of Wisconsin Press, 1976), p. 109.
- <sup>13</sup> Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. (Princeton, New Jersey: Princeton University, 1977), p. 122.
- <sup>14</sup> Patricia Meyer Spacks は "The magnitude of unexpressed female anger implies the danger of madness" と述べ、性的情熱だけでなく、社会の抑圧によって表に表わすことを禁じられた女性の怒りが狂気の危険をはらんでいるとしている。Spacks, *The Female Imagination: A literary and psychological*

- investigation of women's writing*. (London: George Allen & Unwinn Ltd, 1972), p. 65.
- 15 Barbara Hill Rigney, *Madness and Sexual Politics in the Feminist Novel: Studies in Brontë, Woolf, Lessing, and Atwood*. (The University of Wisconsin Press, 1978), pp. 31-2.
- 16 *Ibid.*, p. 24.
- 17 Spacks, *op. cit.*, pp. 71-2.
- 18 Moglen, *op. cit.*, p. 112.
- 19 Maurianne Adams, "Jane Eyre: Woman's Estate." In *The Authority of Experience: Essays in Feminist Criticism*. Arlyn Diamond and Lee R. Edwards. eds. (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1977), p. 156.
- 20 しかし、こうした女性登場人物への注目が必ずしも同性同志の友好的な関係ばかりを指摘していたわけではない。Showalter は息子の言いなりになっている Mrs. Reed や Mr. Brocklehurst の代理を務める Miss Temple、そして Rochester に雇われている Grace Poole といった例を挙げ、次のように述べて家父長制社会での女性同志の関係の難しさやその限界を指摘している。
- Thus the feminine heroine grows up in a world without female solidarity, where women in fact police each other on behalf of patriarchal tyranny. There is sporadic sisterhood and kindness between the women in this world, and Jane finds it ultimately at Marsh End with Diana and Mary Rivers; but on the whole these women are helpless to aid each other, even if they want to. (Showalter, p. 117.)
- 21 齋藤 勇、西川正身、平井正穂編『英米文学辞典』(研究社、1992年), p. 379.
- 22 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*. Ed. by Jane Jack and Margaret Smith (Oxford at the Clarendon Press, 1975), p. 333.
- 23 David Smith, "Incest Patterns in Two Victorian Novels," pt. 1, "Her Master's Voice : *Jane Eyre* and the Incest Taboo." *Literature and Psychology* 15 (Summer 1965), pp. 136-44.
- 24 Margot Peters, *Unquiet Soul: A Biography of Charlotte Brontë*. (New York: Atheneum, 1975), p. 16.
- Moglen, *op. cit.*, p. 112, 他.
- 25 Charles Burkhart, *Charlotte Brontë: A Psychosexual Study of her Novels*. (London: Victor Gollancz Ltd., 1973), p. 73.
- 26 Frederick R. Karl, "The Brontës: The Self Defined, Redefined, and Refined." In *The Victorian Experience: The Novelists*. Ed. by Richard A. Levine. (Ohio University Press, 1976), pp. 146-7.
- 27 Moglen, *op. cit.*, p. 111.
- 28 Showalter, *op. cit.*, pp. 114-5.
- 29 *Ibid.*, p. 115.
- 30 そのほかのフェミニストたちの Red Room 解釈には、たとえば Adams のように性の意識は用いず心理学的側面からのみ考えた、自己防御のための自我への引きこもりの空間という解釈(Adams, p. 143)や、同じく心理学的に捉えた Rigney の、ヒステリーによる一時的な狂気と意識喪失を経験する空間という意見などがある。Rigney の場合は Showalter と同じく Red Room を Bertha と関連づけて考えている。(Rigney, p. 18)
- 31 W. A. Craik, *The Brontë Novels*. (London: Methuen & Co. Ltd., 1968), p. 97.
- 32 James Hunt Maddox, Jr., "The Survival of Gothic Romance in the Nineteenth-Century Novel: A Study of Scott, Charlotte Brontë, and Dickens." (Ph. D. dissertation, Yale University, 1970), p. 86.
- 33 *Ibid.*, p. 92.
- 34 Spacks, *op. cit.*, p. 64.
- 35 *Ibid.*, p. 64.
- 36 Moglen, *op. cit.*, pp. 126-7.
- 37 Rigney, *op. cit.*, p. 16.
- 38 *Ibid.*, p. 26.
- 39 Spacks, *op. cit.*, p. 71.
- 40 Moglen, *op. cit.*, p. 143.